

2 九州出土の皇朝十二銭

高 倉 洋 彰

九州における皇朝十二銭の出土は、第8表にまとめたように、その点数・遺跡数ともにまだ少ない。しかし、それらの発見あるいは報告された時期が1975年以降に集中しているように、今後の急増が予測されることから、現段階の資料を簡単に整理しておくことにする⁽¹⁾。

I 出土皇朝十二銭の種類

1982年1月現在、九州の皇朝十二銭は筑前・筑後・肥後三国に分布する16遺跡から出土し、53枚以上を数える。各遺跡からの出土点数・種類は表に示している。

表で明らかなように、九州ではまだ皇朝十二銭の中の九種（和同開珎・万年通宝・神功開宝・隆平永宝・富寿神宝・承和昌宝・貞観永宝・延喜通宝・乾元大宝）の出土にとどまり、長年大宝・饒益神宝・寛平大宝の三種を欠く。その反面、福岡県太宰府市宝満山上宮遺跡からは出土九種中の貞観永宝を除いた八種が集中して出土している。

いまだ出土点数は少ないが、現状でもおよそその出土傾向をうかがうことはできる。すなわち三種が未出土であるように、出土銅銭の種類に片寄りのみられることに気付く。ことに和同開珎から富寿神宝にいたる五種が出土遺跡・点数ともに多くを占めている。その内訳は、点数不明の例を1枚と仮定すれば、和同開珎4遺跡9枚、万年通宝4遺跡5枚、神功開宝4遺跡8枚、隆平永宝3遺跡5枚、富寿神宝5遺跡5枚となる。ところで筑紫野市京町の結浦墳墓^{むすびがうら}では蔵骨器の中に7枚の銅銭が埋納されていたが、和同開珎2枚を除いて他の5枚は廃棄されたため種別が不明である。また福岡県鞍手郡若宮町・宮田町の汐井掛5号墳墓からは蔵骨器にとまって墓坑内から19枚の銅銭が検出されている。和同開珎5・万年通宝2・神功開宝5の計12枚を除いた残りの7枚は、銅銹や銹着のためその中の1枚が「□□□宝」であることを知りうるにとどまる。この二遺構の不明の銅銭は伴出の例からみて和同開珎・万年通宝・神功開宝のいずれかの可能性が強い。とすれば、遺跡数では富寿神宝がもっとも多いが、出土点数ではその約65%を占める和同開珎・万年通宝・神功開宝に集中しているといえる。ともあれ、こうした出土の点数・遺跡数の流れをみていくと、次第に銅銭が使用されなくなっていく様相を示唆するかのようである。

しかしながら最後の皇朝十二銭である乾元大宝が太宰府市に限られているとはいえ3遺跡から出土し、十一番目にあたる延喜通宝が福岡市海の中道遺跡で3枚も出土している。このことは富寿神宝までの五種の銅銭の多くが墳墓出土であることと関連すると思われる。九州では古代・中世の墳墓に銅銭を埋納した例はほとんど知られておらず⁽²⁾、仮りに過半数を占める墳墓出土例を除けば、和同開珎から乾元大宝にいたるまで出土点数・遺跡数にそれほどの開きが

みられなくなる。表をそのままに読めば、皇朝十二銭が次第に使用されなくなっていく様相がうかがえ、墳墓出土例を除けば出土傾向の時期的な相違を見出せなくなる。この、いわば相反する二つの傾向が表から読みとれる点に資料の不足が如実に示されており、出土の傾向を簡単に論じえない状況をもたらしている。

九州では皇朝十二銭中の九種が出土しているが、ちなみに長門（後には周防）に鑄銭司の置かれた山口県下では和同開珎・神功開宝・隆平永宝・富寿神宝・承和昌宝・長年大宝・貞観永宝の出土が知られている⁽³⁾。出土銅銭の種類は九州のそれとほぼ一致しており、九州で未出土の長年大宝が山口市大畠で出土している点、未出土の三種の銅銭の今後の九州での出土が期待される。

・ II 出土遺構の性格

九州における皇朝十二銭の出土地は福岡・熊本両県（筑前・筑後・肥後三国）に限られている。参考として挙げた皇朝十二銭の可能性の強い種別不明の銅銭を出土した大分県（豊前）中津市の相原墳墓を加えても、九州の北半、なかんずく古代九州の主都大宰府とその周辺に集中している。さらには太宰府市・筑紫野市・久留米市・大牟田市・熊本県玉名郡菊水町・菊池郡西合志村・熊本市でそれぞれ出土が知られていることに、点的ながらも筑前～肥後の古代官道に沿った一連の分布の流れを認めることができる。

出土遺構の性格としては先にも述べたように墳墓の例が目につく。

筑紫野市結浦から隣接する太宰府市君畑にかけての一帯は古代の墳墓地帯で、その火葬墓の一基から和同開珎が検出されている⁽⁴⁾。和同開珎を含む7枚の銅銭を埋納した蔵骨器は有蓋の把手付須恵器壺でそれ自体珍しい形態をなすが、偶然の機会に発見されたため外部施設の有無などは不明である。銅銭が壺内に納められていたことは、蔵骨器の内底に銅銹痕を残すことから疑いない。7枚中2枚は和同開珎であるが、他の5枚は廃棄され現存しない。久留米市杉谷墳墓例も、方三尺ばかりの石囲いの中に納められた須恵器埴の中から和同開珎1枚が出土したというから、同様に蔵骨器内への埋納の例であろう。

これに対し汐井掛5号墳墓では蔵骨器を埋納するために掘られた墓坑内、すなわち蔵骨器の外部から銅銭が検出されている。銅銭は3枚ないし5枚を一組として5カ所に置かれていた。それらは蔵骨器の直下と、それを中心としてほぼ東西南北方向に十字形をなすように配されており、単なる副葬・埋納以上の意識の存在をうかがう。相原墳墓では石棺様施設の中に蔵骨器が置かれ、その内部から金環1、器の下から銅銭1枚が出土したといわれる。やはり蔵骨器外への埋納の例である。

大牟田市大間山墳墓・熊本県玉名郡日置氏墳墓・菊池郡高木原墳墓の各例の出土状況は明らかでない。

第9章 海の中道をめぐる諸問題

第8表 皇朝十二銭出土地名表

	出土 点数	和同 開珎	万年 通宝	神功 開宝	隆平 永宝	富寿 神宝	承和 昌宝	長年 大宝	懿德 神宝	貞觀 永宝	寛平 大宝	延喜 通宝	乾元 大宝	備 考
1 福岡県太宰府市大字観世音寺字学業204	1												1	
2 " " 字大楠325	1					1								
3 " 大字太宰府字三条	1			1										
4 " " 字泉水2743-1	1												1	
5 " 大字北谷字宝満 宝満山上宮祭祀遺跡	?	○	○	○	○	○	○					○	○	
6 " 筑紫野市京町結浦	7	2												5枚は不明
7 " 福岡市南区三宅字コクフ1170-2 三宅廃寺跡	1					1								
8 " 福岡市東区 海の中道(塩屋) 海の中道遺跡	5		1							1		3		
9 " 粕屋郡久山町中久原2515	1			1										
10 " 宗像郡大島村沖ノ島 沖ノ島1号祭祀遺跡	1					1								
11 " 鞍手郡若宮町・宮田町 汐井掛5号墳墓	19	5	2	5										7枚は銘のため不明(内一枚は「□□□宝」)
12 " 久留米市高良内町杉谷	1	1												
13 " 大牟田市 大間山墳墓	1					1								
14 熊本県玉名郡菊水町瀬川字奥原 日笠氏墳墓	○		○											
15 " 菊池郡西合志村高木原	○				○									
16 " 熊本市健軍町	3				3									
参 大分県中津市相原 相原墳墓	1													種別不明
各 銅 銭 の 初 鋳 年		和 銅 元 年	天 平 宝 字 4 年	天 平 神 護 元 年	延 暦 15 年	弘 仁 9 年	承 和 2 年	嘉 祥 元 年	貞 観 元 年	貞 観 12 年	寛 平 2 年	延 喜 7 年	天 徳 2 年	
		708	760	765	796	818	836	848	859	870	890	907	958	

- A 九州歴史資料館編『大宰府史跡一昭和56年度発掘調査概報一』1982
- B 前川威洋・新原正典『筑紫郡太宰府町所在御笠川南条坊遺跡(2)』(福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告3)1976
- C 小田富士雄「宝満山遺跡発掘調査概報」(『筑前国宝満山信仰史の研究』)1980
- D 渡辺正気「和同銭副葬の一蔵骨器」(九州考古学1)1957
- E 二宮忠司編『三宅廃寺』(福岡市埋蔵文化財調査報告書50)1979
- F 『東京国立博物館収蔵品目録』
- G 第三次沖ノ島学術調査隊編『宗像沖ノ島』1979
- H 上野精志「汐井掛墳墓の調査」(九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告XX)1978

2 九州出土の皇朝十二銭

出 土 遺 構	共 伴 遺 物	参 考 文 献	保 管	発 見 年
溝 (S D205 付近)	土師器・青磁・白磁など	文 献 A	九州歴史資料館	1981年
溝 (S D2012)	土師器・青磁・白磁・石玉帯・火杖など	文 献 A	九州歴史資料館	1981年
表塚			個人蔵	
溝 (御笠川南条坊遺跡第3次調査下層 S D306溝内上層)	土師器・須恵器・青磁・緑釉・瓦・石鍋・鉄片など	文 献 B	福岡県教委	1973年
祭祀遺構	土師器・須恵器・奈良三彩など	文 献 C	散 佚	
火葬墓 (蔵骨器)		文 献 D	西正寺	1946～47年頃
遺物包含層	土師器・須恵器・瓦類	文 献 E	福岡市教委	1978年
遺物包含層	開元通宝・土師器・黒色土器・越州青磁・白磁・石鍋・鉄器など	本 報 告	福岡市教委	1981年
	五銖銭・開元通宝・乾元重宝・皇宋通宝・永樂通宝・寛永通宝など93462点	文 献 F	東京国立博物館	
祭祀遺構	土師器・須恵器・奈良三彩・八稜鏡・金銅製品・滑石製品など	文 献 G	宗像大社神宝館	1970年
火葬墓 (蔵骨器埋納墓壇)		文 献 H	福岡県教委	1975年
火葬墓 (小石室)	須恵器甕 (蔵骨器?)	文 献 I	不 明	1852年以前
火葬墓		文 献 II		
火葬墓 (蔵骨器)	日置氏墓誌銅板	文 献 J		1794年
火葬墓 (蔵骨器)		文 献 K		
		文 献 F	東京国立博物館	
火葬墓 (石棺様施設中に蔵骨器)	金環 1	文 献 L		1942年頃以前

I 矢野一貞『埴厚遺物縮図』1852 (『西谷火葬墓』1971 に引用)

J 松本健郎「<日置氏墳墓>考」(『鏡山猛先生古稀記念古文化論巧』) 1980

K 坂本経堯「墓誌銅板を副葬した玉名郡人日置氏墳墓考」(『肥後上代文化の研究』) 1979

L 小田富士雄「大分県の火葬墓」(『白濁遺跡』) 1958

祭祀遺構からの出土は2例知られている。

宝満山上宮祭祀遺跡からは九州出土の皇朝十二銭九種中の八種が出土している。宝満山は太宰府市の北東に位置する霊山で、全山がその山麓に鎮座する竈門神社の神体となっている。竈門神社の記録上の初見は延暦22年(803)のことであるが、出土遺物などによってその鎮座はさらに古くさかのぼって考えられる⁽⁵⁾。海拔868mをはかる山頂は切り立った巨岩からなる。その巨岩に囲まれたわずかな平坦部および岩壁上方の岩の間などに遺構・遺物包含層があり、中世にいたるまでの遺物が調査・採集されている。皇朝十二銭は岩壁上方から出土したらしく奈良三彩小壺などの奈良時代の遺物も出土している。しかし祭祀が長期にわたって繰り返されている上に、遺物は採集によっており、出土の詳細は明らかでない。また銅銭のほとんどは散逸している。しかし多種類の皇朝十二銭の出土は大いに注目され、さらに宋銭・明銭などの中国銭も採集されており、皇朝十二銭以来の連綿とした銭貨の奉納を知りうる。

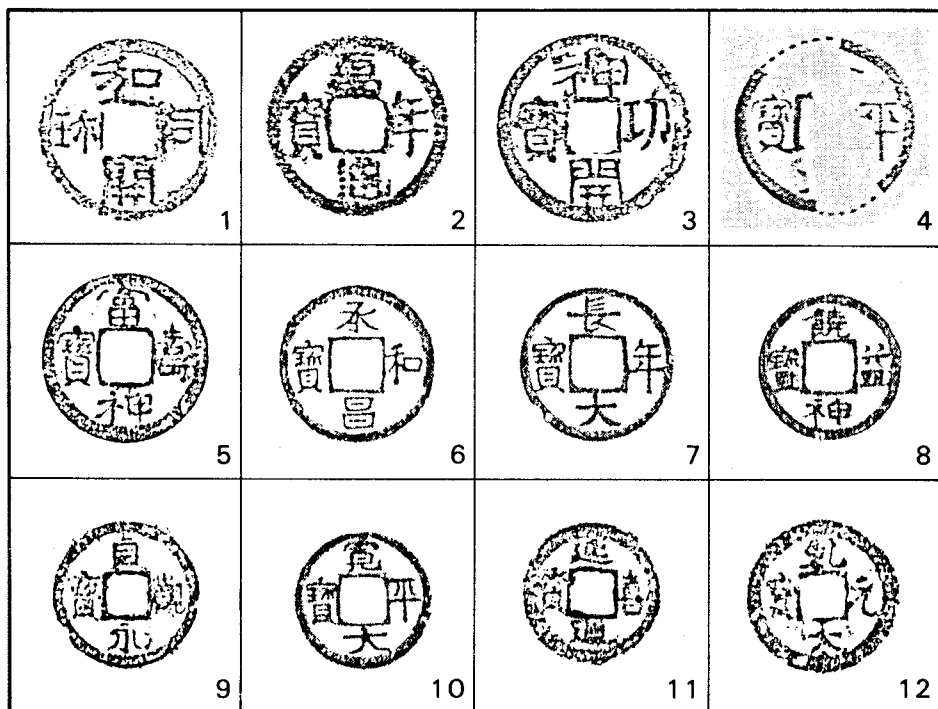
玄海の孤島沖ノ島の祭祀遺構については海の子倉院として今日広く知られている。その祭祀遺構は時期的に形態を変遷させているが、1号祭祀遺構はその最終形態の露天祭祀の代表例である。そこから祭祀としてつくられた大量の土器や滑石製形代に混在して奈良三彩小壺や富寿神宝1枚が検出されている。

このように宝満山や沖ノ島の祭祀遺構では皇朝十二銭は奉納品の一種となっている。

皇朝十二銭は寺院跡からの出土が多いといわれる⁽⁶⁾。しかし九州ではその例は少ない。福岡市三宅廃寺遺跡では寺跡は発掘調査によっても遺構的にはほとんど把握されていないが、出土土器に「造寺」「寺」「佛」「堂」などの文字が墨書・ヘラ書きされた例があり、寺院跡と判断される。その包含層中から富寿神宝1枚が検出されている。太宰府市大字観世音寺字学業の溝から乾元大宝が1枚出土している。この溝は観世音寺と学校院の境界付近に位置するが、出土遺物などからみて観世音寺に属する可能性が強いと思われる。

大宰府からの出土が多いことは古代九州の主都であったことを考慮すれば当然といえる。これまで紹介した以外にも、神功開宝(大字太宰府字三条)、富寿神宝(大字観世音寺字大楠)乾元大宝(大字太宰府字泉水)が出土している。三条例には採集資料のため出土遺構の性格は明らかでない。大楠・泉水例はいずれも溝中からの出土で、ことに大楠例は大宰府政庁域⁽⁷⁾の前面張出し部の西を限ると推定される大溝付近から出土しており、官衙地区(遺構)からの出土例とみなすことができよう。万年通宝1・貞観永宝1・延喜通宝3の計5枚を出土した福岡市海の中道遺跡は出土遺物の検討によって考察されるように、大宰府関連の施設の可能性がある、そうであれば一種の官衙遺構とすることができよう。

寺跡・官衙地区(遺構)とした出土例は明瞭な遺構をとまったり、埋納・奉納のような明確な意識の存在を推定しうる例を欠いている。その出土も1枚の例が多く、換言すれば落し物的な出土状態を示しており、その背景としての銅銭の流通を考えさせる余地が生じてくる。し



参考… 6 (承和昌宝)・7 (長年大宝)・8 (饒益神宝)・10 (寛平大宝) : 奈良県平城宮跡
 1 (和同開珎) : 筑紫野市結浦、12 (乾元大宝) : 太宰府町大楠
 3 (神功開宝)・4 (隆平永宝) : 太宰府町満山、5 (富寿神宝) : 太宰府町大楠
 2 (万年通宝)・9 (貞観永宝)・11 (延喜通宝) : 福岡市海の中道

第77図 九州出土の皇朝十二銭各種

かしそれにしても海の中道遺跡からの5枚の出土はいささか多すぎるし、万年通宝と延喜通宝が単純に共伴するとも思えない。遺跡の全容が明らかになればさらに銅銭の出土が予測されよう。こうしたまとまった点数の出土は宝満宮上宮祭祀遺跡・結浦墳墓・汐井掛5号墳墓で知られているが、海の中道遺跡が祭祀遺跡・墳墓遺跡である可能性はまったくないといっても過言ではない。そこからのまとまった出土は、一応官衙的な性格の場所からと考えておくが、局部的に偶然ではない何か意図的な行為の存在した空間を想定すべきかもしれない。

ともあれ述べてきたように、皇朝十二銭を出土する遺構の性格は、墳墓・祭祀遺構・寺跡・官衙地区（遺構）のおおよそ4種類に大別することはできよう。

Ⅲ 製作地の問題

九州で出土する皇朝十二銭の製作地がどこであるのか、興味のある問題である。それについては次にあげる2点の史料があり、検討を加えておきたい。

(A) 和銅三年正月丙寅、大宰府献銅銭（『続日本紀』）

(B) 霊龜二年五月丙申、勅、大宰府百姓家有藏白鑄、先加禁断、然不遵奉、隱藏売買、是以鑄銭悪党、多肆奸詐、連及之徒、陷罪不少、宜嚴加禁制、無更使然、若有白鑄、搜求納於官司、（『続日本紀』）

(A) は和銅3年(710)に「大宰府が銅銭を献じた」ことの報告で、鑄銭を直接示すものではない。しかし和同開珎の鑄造開始後の間もない時期に銅銭を献ずることのできた理由は何なんであろうか。八木充氏は天武12年(683)に「詔曰、自今以後、必用銅銭、莫用銀銭」(『日本書紀』)とあり7世紀後半に銭貨の存在を確認されることから、大宰府あるいは同年の播磨国の銅銭の貢献を和銅元年に始まる銭貨の官鑄の結果用いられなくなった旧銭貨の回収にともなう銅銭の貢献と解されている⁽⁸⁾。氏に従えば、(A)は大宰府における銅銭の鑄造を前定とした記載ではなくなくなるが、旧銭貨の回収にともなう貢献であれば大宰府では和同開珎の鑄造以前から相当に銭貨が流通していたことになる。

これに対し、榮原永遠男氏は、和銅以前の大宰府や播磨国で私鑄銅銭が流過程における交換手段として使用されていたとは考え難いとされる。そこで和同開珎の鑄造開始の翌和銅2年8月に銀銭が廃止され銅銭への一本化がはかれることから、銀銭に見あうだけの大量の銅銭が必要となり、大宰府や播磨国などにも銅銭の鑄造を担当させたと解釈されている⁽⁹⁾。

(B) には、靈龜2年(716)に、大宰府の百姓の中に家に錫と鉛の合金と思われる白鉛を蔵する者が居るのでその売買に禁制を加えたこと、しかしその禁制は守られず「鑄銭悪党」が多く、の多の奸詐をほしいままにしていること、したがって禁制をさらに嚴重にもし白鉛を蔵するものがあれば搜索して官司に納めさせること、が記載されている。榮原氏は、大宰府で採銅が行なわれていた事実を踏まえられ、この記載から「鑄銭悪党」といわれる鑄銅技術者の居たことが知られるとして、この史料からも大宰府における鑄銭の可能性を指摘されている⁽⁹⁾。しかし

(B) には大宰府に銅銭の鑄造に必須の白鉛の存在したことは記されているが、その売買の対象となった「鑄銭悪党」が大宰府管内に居たかどうかは明らかでない。もっとも観世音寺・妙心寺の銅鐘の鑄造で明白なように大宰府には優秀な鑄造技術者が居り、文脈からみても「鑄銭悪党」の大宰府管内居住の可能性は強いが、それは「鑄銭悪党」による贗せ金造りを意味しても官鑄を意味するとは解し難い。しかし贗せ金造りが横行したのであれば、その背景に相当に銅銭が流通したであろうことは推測しうる。

(A)・(B) の史料からは大宰府における案外な銅銭の流通が想定される。しかしその鑄造については可能性を否定できないといった程度で、その有無の判断は困難である。そうであれば出土皇朝十二銭のそれぞれから製作地を復原するしか方法はない。ところが出土品の中で現存しかつまた点検の可能な例は少数であり、散在しているため実物を同時に比較対照しう機会を得難い。試みに拓影を用いて和同開珎・万年通宝・富寿神宝を比較してみたが、銅銭のような微妙な遺物の拓影による比較には限界があり、実物によって細部の検討を試みない限り、成果は得られない。幸いというか、九州における皇朝十二銭の研究はまだ資料の集積の段階にあるから、今後の研究においてはこの点を念頭に置いて製作地の検討を心掛ける必要があるう。

2 九州出土の皇朝十二銭

註

- (1) 表の作成にあたっては

栄原永遠男「日本古代銭貨出土一覧表および附表」(続日本紀研究 169) 1973

同 「日本古代銭貨出土一覧表(その2)」(続日本紀研究 178) 1975

小野真一・秋本真澄『駿河伏見古墳群』(沼津考古学研究所研究報告 4) 1971

を参考とし、小田富士雄・島津義昭・副島邦弘・西健一郎・山崎純男・横田義章氏をはじめ多くの方々に貴重な御教示を得た。

- (2) 渋谷忠章・上野精志「日本各地の墳墓—九州—」(『仏教考古学講座』7) 1975

- (3) 山口県下には下関市長府・山口市大島一带に鑄銭司の所在が知られており、両地をはじめ萩市見島ジョコンボ、柳井市安行、同市大蔵で出土例が知られている。

- (4) 奈良国立博物館監修『天平の地宝』1961

によれば、1955年3月に福岡県太宰府町片ノ谷君ヶ畑で有翼骨壺から和同開珎1枚が出土したとされている。しかし図版に示された蔵骨器は明らかに結浦墳墓出土のそれであり、所有者も一致している。同一であろう。

- (5) 小田富士雄「古代に於ける筑前竈門山寺の活動」(史迹と美術31—10) 1961

- (6) 註(1)小野・秋本文献。

- (7) 石松好雄「大宰府政庁の庁域について」(九州歴史資料館研究論集3) 1977

- (8) 八木充「周防鑄銭司」(『周防鑄銭司跡』) 1978

- (9) 栄原永遠男「鑄銭司の変遷とその立地」(『河内国府と国分寺址の検討』古代を考える10) 1977